

## 日本語のジャンル構造と語彙-文法的資源 テキスト形成的メタ機能を中心に

阿 部 聡

### Abstract

The aim of this paper is to investigate how lexico-grammatical resources in Japanese contribute to realization of generic structure of texts. We have analyzed two texts: one belongs to genre of Explanation and the other to genre of News story. The Explanation text is structured serially, stage by stage, while the News story text is structured orbitally; the text has a nucleus and satellites which refer back to the nucleus. This difference in structure results from the difference of purposes of these genres.

We have further analyzed these texts in terms of textual metafunction and nominalization. In the Explanation text, New in Macro Theme and hyper Theme predicts what to follow and clausal Themes create cohesive relations inside elements of schematic structure and relations to Macro Themes or hyper Themes. A shift to a new stage of schematic structure is indicated by nominalization in Theme which summarizes what has been said and nominalization in N-Rheme which presents culmination of New information given in the text. In the News story text, the Themes of first clause in each satellite refer back to information presented in the nucleus. These Themes create boundaries between satellites and cohesive relations to the nucleus.

キーワード……ジャンル構造 テキスト形成的メタ機能 首尾一貫性

### 0. はじめに

テキストとは、「人のおこなう言語活動において、あるまとまりをもった表現の具体相」(野村 2000:1-2)である。すなわち、テキストは首尾一貫性 coherence を備えたものである。この首尾一貫性はどのようにして生み出されているのだろうか。これを明らかにするには、テキストの構造の解明を必要とする。本稿では、選択体系機能理論 systemic functional theory (以下 SFT) におけるジャンル genre、ジャンル構造 generic structure を分析の枠組みとし、このジャンル構造の具現に語彙-文法的資源 lexico-grammatical resources がいかに寄与しているのかということについて、テキスト形成的メタ機能を中心に分析を行う。

## 1. ジャンル

本節では、SFT におけるジャンルの定義、ジャンル構造の特徴を概観する。

### 1.1. ジャンルとは

SFT におけるジャンルは、伝統的な用法・定義（「詩のジャンル」、「小説のジャンル」という場合の意味や定義）とは異なる。SFT におけるジャンルとは、「一定の『始め - 中 - 終わり』という『段階的な展開構造の類型』のこと」（山口 2000:38）であり、また、社会・文化における目的という観点から機能的に定義づけられるものである（Eggins & Martin 1997:236）。したがってジャンルは文芸の世界に限られるものではなく、日常会話や書記テキストなどにも見られるものであり、対人的相互作用の目的によって種類と展開構造が決まるものである。たとえば、「指示 instruction」というジャンルは、「何かをすること・何かを作ることを（誰かに）伝えること」であり、テキストの構造は「目標（何をする・つくるのか）^材料^方法」という構成要素からなる段階的な構造<sup>1)</sup>である（Derewianka 1990:27 より）。

### 1.2. ジャンルの構造

ジャンル構造の各段階、すなわち構成要素は、それぞれテキスト全体の目的を果たすために適した機能を担う。指示のジャンルでの「目標」「材料」「方法」は、構成要素の機能的表示である。こうしたテキストの展開構造を SFT では図式的構造 schematic structure と呼ぶ。

図式的構造は、Eggins & Martin (1997:236)が “Genre theory suggests that texts which are doing different jobs in the culture will unfold in different ways, working through different stages or steps” としているように、テキストの目的に応じて異なる。

Martin (1995, 1997)は、この図式的構造を「粒子的 particulate」なものであると指摘している<sup>2)</sup>。これは、観念構成的メタ機能による節の分析を拡張したものであるが、これには軌道的構造 orbital structure( 中心となる核とそれに随伴するサテライトを持つ )と連続的構造 serial structure ( 単一の核を持たない多中心的構造 ) の 2 種類がある。それぞれ図 1、図 2 として示す。

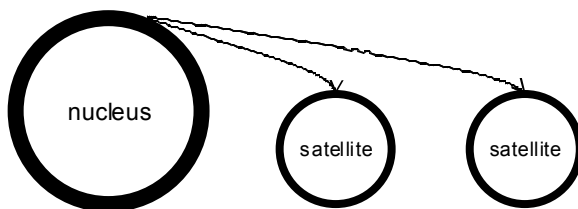


図 1 軌道的構造(Martin 1997:17 ‘Figure 1.9 Types of structure in relation to modes of meaning’の一部を筆者が再構成したもの)

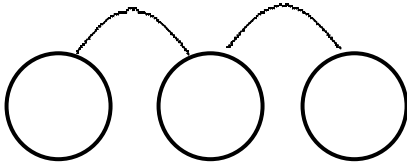


図 2 連続的構造(Martin 1997:17 ‘Figure 1.9 Types of structure in relation to modes of meaning’の一部を筆者が再構成したもの)

軌道的構造は、核とサテライトとの間には意味的關係があるが、サテライト間では意味的關係が希薄である。連続的構造は、それぞれの構成要素が意味的にむすびついており、テキストは段階的に進行する。

なお、ジャンル構造は、Eggins & Martin (1997:236)が指摘しているように、決定論的なものではなく、むしろ蓋然論的なものである。つまり、ある目的を果たす際には、特定のジャンルが選択され、テキストは特定の方法で展開するが、それはジャンルの選択の蓋然性が高いということであり、構成要素の欠落などの可能性は十分にあるのである。

## 2. 日本語テキストのジャンル構造

本節では、事実のジャンル *factual genre* から 2 つのジャンルを取り上げ、その構造を分析、記述する。

### 2.1. 説明

説明 *explanation* というジャンルの目的は書き手の判断がなぜなされたのかという理由を示すことである(Martin 1989)。説明というジャンルでは、単なる事実の提示、羅列が行われるのではなく、事実に対する判断が提示され、それに対する理由付けがなされる。これらの特徴は日本語の説明のジャンルにも当てはまると思われる。

説明のジャンル構造、図式的構造は次のようになる（ここでは、Butt et. al. (1995) の分析を参考にした）。

- (1) 説明のジャンル構造：概略的記述  $\wedge$  詳細説明<sup>n</sup>  $\wedge$  （要約）<sup>3)</sup>

説明すべき対象や判断を提示し、それに対する具体的で詳細な説明がなされる、という段階を経て、テキスト全体の目的（なぜそう判断するのかを説明する、現象の理由についての説明をする、あるものがどのように働いているかを説明する）を達成するのである。

テキスト 1 はこの説明のジャンルの例である<sup>4)</sup>。

テキスト 1

A)概略的記述	(1)これまで覚醒状態が重要だということを強調したが、泣きもまた、相互作用においても、子どもの発達においても重要な意味をもつ。
B)詳細説明 1	<p>(1)泣きの研究によれば、次のような変化が見られる（北海道大学の陳省仁氏による）。</p> <p>(2)生まれたばかりの新生児は突然激しく泣きだし、最初の一、二回の発声は非常に長く、五、六秒から十二、三秒続き、その後、リズムカルに徐々に激しさが低減しながら発声が数秒間、数回から十数回続いて終了する。</p> <p>(3)生後二日においては、泣きは短い破裂音で始まり、やや長い泣き声を六、七回発してからリズムカルな泣き声になり、出生直後の泣きの二、三倍の持続時間の後に終了する。(4)この時の泣きは、胸を広げるとか、肩を広げるといった深い呼吸運動が発声する前に観察されはじめ、出産直後の泣きと比べて、発声がすでに予期され、準備された行為であるというふうに見える。</p> <p>(5)生後四週ごろになると、泣きは短い破裂音を繰り返えし、リズムカル長い発声に達するまでに数十秒かかるようになる。(6)この時期には、まわりの視覚・聴覚刺激に対する視覚的な探索行動が出現する。(7)つまり、泣きにおいて発声と視覚探索行動が同時に観察されるようになるのである。</p> <p>(8)八週ごろからエスカレートが早く進み、二、三回の長い泣きの発声が容易に出現するようになる。(9)そして、泣きの発声に喃語（言葉に似た音声）が時々混じるようになる。</p>
C)詳細説明 2	<p>(1)このような泣きの表出の変化に対して、養育者（通例は母親）の反応も変化していく。</p> <p>(2)とくに視覚的探索行動が現れると、泣きやぐずりに対する養育者の対処の仕方も変化していくのである。(3)生後三、四週間において泣きを終了させる最も有効なやり方は、抱き上げたり何かをしゃぶらせるといったものののだが、視覚的探索行動が出現すると、養育者が声をかけるとか、顔を見せるなどの、遠く離れてするやり方も効き目がでてくるのである。</p>
D)要約	<p>(1)このようにして、乳児側の泣きの変化はまた、まわりの大人との関係の変化でもある。</p> <p>(2)その原因が乳児側にあるのか、親のかかわりにあるのかといえば、おそらくその両方で、また個人差も大きい。(3)それにしても、泣きという行動状態が、新生児においてはただその「状態」としてあったのに、徐々に子ども自身がその泣きをコントロールし、その泣きの中に養育者を巻きこんでいくという様子が見られるのである。</p>

（無藤隆(1994) pp.32-3.）

A)では、概略と「重要な」という判断が提示されている。B)は(A1)の「子どもの発達においても」という側面について、研究成果を示すことで説明しており、C)は B)との関連を保ちつつ、(A1)の「相互作用においても」という側面について説明を行っている。最後に B)、C)の説明を

D)で要約している。テキスト 1 はこのような構造になっている。この段階的構造は、A)に示された判断について説明するというテキスト全体の目的を果たすために用いられており、各構成要素はその目的に寄与するべく機能している。

説明のジャンル構造は、A)を核とし、以降の構成要素がそれに依存している軌道的構造とみることできるかもしれない。しかし、たとえば、C)は、B)に示された乳児の泣きの変化に対応した養育者の対処の変化を説明している。構成要素間に内容上の連携が見られるのである。このことから、説明のジャンル構造は、軌道的構造よりもむしろ連続的構造（図 2 参照）であると見るべきであろう。

## 2.2. 報道テキスト

報道テキストの目的は、社会秩序に対する脅威を含意する話題を、報道価値の高いものとして提示することである（White 1997 参照）。White (1997)は、次のように述べている。

[T]he subject matter deemed newsworthy by the media always entails some perceived threat to the social order - natural disasters, outbreaks of disease, price rises and stockmarket plunges disrupt the material order; elections, leadership challenges and warfare disrupt the *status quo* of power relations; crimes and bureaucratic bungles destabilize the moral order. In terms of informational content, therefore, hard news reporting texts are directed towards the identification of potential or actual sources of social-order disequilibrium. (p.106 強調は原文による)

情報内容の観点から見ると、このように、重大ニュース報道テキストは社会秩序の不安定の潜在的ないし実際の原因の同定に方向付けられている。

報道テキストのジャンル構造は、他のジャンルとは大きく異なり、見出しとリード文によって構成される核と本文 body という 2 つの部分からなるもので、本文は核に対するサテライトからなる。つまり、軌道的構造（図 1 参照）である。この構造では、核とサテライトの間には意味的つながりがあるが、各サテライト間には意味的つながりが希薄である。核の内容は、事件などの核心に迫るものであり、最も報道価値の高いものである。それに対して、本文は、新しい意味を導入したり、展開したりするのではなく、核の内容を特定化する（White 1997:115）

核とサテライトの間の意味的關係によって、サテライトには機能的な標示が可能である。White (1997)はこの標示を次のようにまとめている。

- (2) -Elaboration 敷衍：一文ないし複数の文が、見出し・リード（核）において提示された情報の、詳細な記述もしくは例示を行う。

-Cause-and-effect 原因-結果：核の「重大局面」の原因、理由、「重大局面」の結果、目

的を表す。

-Justification(issues report)正当化（問題提起レポートの場合）：核において提示された報道価値の高い主張を支持する証拠、理由付けを行う。

-Contextualization コンテキスト化：核で提示されたできごとや発言を時間的、空間的、社会的コンテキストに関係づける。

-Appraisal 評価：核の内容が評価される。典型的には、有識者、外部の情報源による評価である。（p.115）

この White の提案するジャンル構造にしたがって、日本語の報道テキストを分析する。分析したテキストをテキスト 2 として下に示す。

## テキスト 2

A)核	<p><b>愛知県警機動隊長補佐を逮捕、横領総額 1 千万円か</b></p> <p>(1)愛知県警機動隊の幹部が隊員の親ぼく会費約 85 万円を着服していたことが分かり、同県警捜査 2 課と小牧署は 22 日、この幹部を業務上横領の疑いで逮捕した。(2)幹部は、隊員から集めた親ぼく会費や食事代などを管理する立場にあり、横領総額は約 1000 万円に上るとみられている。</p>
B)サテライト 1 敷衍	<p>(1)逮捕されたのは、同隊隊長補佐の西川広志容疑者（50）（三重県東員町城山）で、今年 7 月下旬と 8 月上旬の 2 回にわたり、隊員が毎月積み立てている親ぼく会費から計 85 万 7000 円を横領した疑い。(2)西川容疑者は、うち 33 万円を住宅ローンの返済に、52 万 7000 円を乗用車の購入費にそれぞれ充てていた。</p>
C)サテライト 2 敷衍	<p>(1)西川容疑者は、昨年 3 月に知多署会計課長から機動隊に異動。(2)会計担当の隊長補佐となり、冠婚葬祭や隊内行事のための親ぼく会費や、通常勤務の隊員の食事代に充てる食事代預かり金、部隊出動の際の副食代に使う共益費を隊員から徴収していた。(3)これらの現金を振り込む銀行の預金口座と金庫は、西川容疑者が 1 人で管理しており、現在の職務に就いてから計約 1000 万円を着服していたという。</p>
D)サテライト 3 敷衍 + コンテ クスト化	<p>(1)先月下旬、複数の食材納入業者から、「代金の支払いが滞っている」との苦情が寄せられ、不正が発覚した。(2)県警では、これらは公金にあたらないため、監査の対象にしていなかったと説明している。</p>
E)サテライト 4 コンテ クス ト化	<p>(1)西川容疑者は 1970 年に事務職員として採用され、主に警察署や県警本部の各部署で会計業務を担当していた。</p>

(Yomiuri Online 2001 年 10 月 22 日 20:21)

A)が核で、事件の概要が示されている。B)は(A1)の内容を詳述し、C)は、(A2)の内容を詳述している。D)は事件が発覚した状況と事件が発覚しにくかった状況を説明している。E)は容疑者についての背景的情報であり、社会的コンテキストへの関係づけと見ることができる。本文にあたる B)から E)までの各サテライトは、サテライト相互間の意味的結びつきが非常に希薄である。このため、サテライトは、テキストの機能性を壊すことなく、その順序を入れ替えることができる(White 1997:119)。

なぜこのような構造をとるのだろうか。White (1997:128)は機能的観点から説明している。このような構造を用いるのは、核が「報道価値の高い情報を持っている」ということを示すためであり、核を常に焦点とするためである。サテライトも、核がテキスト的に、情報的に卓立しているものとするためにふさわしい展開となっているのである。テキスト全体の目的に合致した構造であると言える。

本節では、事実のジャンルに分類される 2 つのジャンル、説明と報道を取り上げた。どちらも大まかにいえばその目的は「事実を伝達すること」だと言えるだろう。しかし、説明は書き手の判断の理由を説明することを目的とし、報道は社会秩序の不安定をもたらすような出来事を報道価値のあることがらとして提示することを目的としており、目的に応じてテキストの構造も異なっている。このテキストの構造、ジャンル構造は、目的を果たすのにふさわしい、機能的な構造となっているのである。

### 3. 語彙-文法的資源      テキスト形成的メタ機能

ジャンル構造の展開に対して、語彙-文法的資源はどのように貢献しているのだろうか。本節では、SFT における 3 つのメタ機能のうち、首尾一貫性への寄与が最も大きいテキスト形成的メタ機能 textual metafunction を中心に考察を進める。以下では、まずテキスト形成的メタ機能の概観を行い、ついでテキスト形成的メタ機能との関連の深い名詞化という語彙-文法的資源を取り上げる。そして、これらの語彙-文法的資源の観点から、前節のテキスト 1、2 の分析を行う。

#### 3.1. テキスト形成的メタ機能とは

まず、テキスト形成的メタ機能とはどのようなものをみておこう。SFT では、言語とコンテキストを分層化して捉えており、言語システム内も意味層、語彙-文法層、音韻 / 書記層の 3 つに分層化している。このうち、意味層と語彙-文法層(この 2 層を合わせて内容層と呼ぶ)は、3 つのメタ機能、すなわち観念構成的メタ機能 ideational metafunction、対人的メタ機能 interpersonal metafunction、そしてテキスト形成的メタ機能によって組織化されている。観念構

成的メタ機能は心的外的経験事象を解釈構築するための資源（論理構成的メタ機能 logical metafunction と経験構成的メタ機能 experiential metafunction からなる）であり、対人的メタ機能は話し手と聞き手との間の役割関係を成立させるための資源、そしてテキスト形成的メタ機能は観念構成的意味、対人的意味を、テキストの中に位置づけられる情報として提示するための資源である（Matthiessen 1995、山口 2000 参照）。意味層は語彙-文法層によって具現 realize されるが、通常、観念構成的意味は、語彙-文法層の観念構成的メタ機能によって具現される。同様に対人的意味は対人的メタ機能によって、テキスト形成的意味はテキスト形成的メタ機能によって具現される。

語彙-文法層におけるテキスト形成的メタ機能は主題構造 thematic structure、情報構造 information structure、結束性 cohesion からなる。本稿では、主題構造と情報構造を取り上げる<sup>5)</sup>。

### 3.1.1. 主題構造

主題とは、メッセージとしての節の一部である。メッセージとしての節は、「主題 + 題述」という構造をとる。主題の機能は、題述を解釈するための枠組みを提示すること、局所的コンテキストを提供することである(Fries 2002、Matthiessen 1995 参照)。日本語の主題は、「名詞群 + は」という形で具現されることが多い。しかし、林(1973:200)が「日本語では総じて副助詞『は』がつくことによって題目語が示されることが多いが、それとて、一概にはいえない」と指摘しているように、「は」が付加された名詞群がすべて主題であるというわけではない。また、「は」が付加されていない場合でも、主題として機能することがある。山口(2000:30)は、「節頭の要素に主題の機能を担わせることが普通である」としており、多くの場合には「は」が付与されるが、節頭に配置することだけで主題の機能を具現することが可能だとしている。

日本語の主題構造の特徴は、過程構成 transitivity を前提としない構成が可能なことである(山口 2000:30)。たとえば、野田(1996)が挙げている「このにおいはガスが漏れているよ」構文は、「このにおい(は)」を過程中心部「漏れる」に結びつけることが難しい。つまり、過程構成を前提としていない文であると考えられる。こうした点から山口は「日本語では、このように、観念構成的機能に属する過程構成よりも、テキスト形成的機能に属する主題-題述構造が節の主要な構成原理となることがあり、生産性の高い構造であると言える」(p.30)としている。

主題構造は、節内で機能するだけでなく、テキスト構成 texture に寄与するものである。テキスト構成への寄与は、主題選択パターン（もしくは主題展開パターン）による。これには主題の内容が同一で展開するパターン、先行節の題述の内容を主題として、段階的に展開するパターン、そしてマクロ主題（ハイパー主題）<sup>6)</sup>から後続節の主題が派生するパターンの 3 種類のパターンがある<sup>7)</sup>。さらに、主題選択は展開の技法 method of development (Fries 1983 参照) が関与している<sup>8)</sup>。



### 3.1.2. 情報構造

情報構造は基本的には旧情報 Given と新情報 New からなる。ただし、旧情報を含まない場合もある。この新旧情報構造の主要な部分は、新情報である。新情報は単に聞き手が知らないことと定義されるのではなく、情報としての価値が高く、聞き手、読み手が注意を払うべき情報として定義されている(Halliday 1994:298)。さらに通常、新情報は題述部分に現れることから、Fries(2002:126)は、節のなかで情報価値の高い部分 newsworthy part の核となる要素を N-Rheme と呼んでいる。

日本語の新情報、N-Rheme は、通常、語順によって具現される(高見 1995 参照)。無標の場合、過程中核部の直前の位置により具現されるが、とりたて詞が付加される場合は、基本的に、それが付加された要素が新情報となる。また、「のだ」によって情報焦点が移動することもあり、この場合は有標で、動詞の直前以外の要素となる。

Martin & Rose (2003)は、主題概念を拡張することでマクロ主題、ハイパー主題を設定したのと同様に、マクロ新情報 macro New、ハイパー新情報 hyper New という概念を提示している。ハイパー新情報とは、パラグラフ(=テキストの意味的なまとまり)の要点 point を表すもので、各節の新情報を要約したもの、新情報の頂点 culmination だと言うことができる。(Martin 1993: 247-249、Martin & rose 2003:182 参照)。マクロ新情報はハイパー新情報よりもさらに上位のまとまりを要約したものである。マクロ新情報、ハイパー新情報における節レベルの新情報には要約的な、密度の高い情報が配置されると考えられる。

### 3.2. 名詞化

ここで、文法的比喩 grammatical metaphor の一つ、名詞化 nominalization を取り上げる<sup>9)</sup>。これは、テキスト形成的メタ機能に属するものではないが、テキスト形成的メタ機能との関連が深いものである。

名詞化は意味層と語彙-文法層との分離、すなわち層間の不一致によって生じる文法的比喩である。意味層における経験構成的意味の基本単位であるフィギュア figure は、意味層と語彙文法層が自然な関係にある場合、すなわち一致した congruent 具現の場合、経験構成的メタ機能の選択により、節として具現される。これに対して、層間が一致しない場合、すなわち比喩的な metaphorical 具現の場合、フィギュアは節ではなく、名詞群 nominal group として具現される。フィギュアの名詞群による具現を名詞化(過程の名詞化)と呼ぶ。

主題と名詞化の関連については、「背景化 backgrounding」効果(Halliday & Matthiessen 1999:239)の観点から捉えることができる。背景化効果は、主題と旧情報が同時に同じ構成要素によって具現される場合に生じる。聞き手が既に知っていることを出発点とすることができ、それにより、聞き手がまだ知らないこと(新情報)を前景化するという効果がある。この背景化は、名詞化によって先行する節を圧縮し、節として具現されていた意味を新しい節の主題にすること

で生み出される。こうした名詞化により、議論を段階的に展開することができる。

名詞化が新情報、N-Rheme 位置に現れる場合はどうであろうか。この場合、後続するテキストの内容を名詞化で圧縮した形で提示することとなる。そのため、それ以降の節ではより一致した具現で、具体的な意味内容を展開していくこととなるはずである。こうした場合の新情報はハイパー主題をマークするという機能を担う。

### 3.3. 分析

#### 3.3.1. 説明

テキスト 1 では、まず、(A1)で「泣きも（主題 T）＋重要な意味を持つ（題述 R）<sup>10)</sup>」という節でテキストのマクロ主題を提示している。「重要な」という判断が新情報であり、これを後続部分で説明していく、という展開を予告していると言える。

(B1)は、「泣きの研究によれば（T）＋次のような変化が（名詞化 N）見られる（R）」という主題構造、情報構造をとり、名詞化／新情報部分がテキストの展開を予告しており、この節はハイパー主題として機能する。以下では、(B2)「生まれたばかりの新生児は」 - (B3)「生後二日においては」 - (B5)「生後四週ごろになると」 - (B6)「この時期には」 - (B8)「八週ごろから」という主題で、時間的な展開（展開の技法）を示す。これは、マクロ主題(A1)の、「子どもの発達においても」の部分に対応する。その一方で(B2)「最初の一、二回の発声は」 - (B3)「泣きは」 - (B4)「この時の泣きは」 - (B5)「泣きは」 - (B7)「泣きにおいて」 - (B9)「泣きの発声に」という、「泣き」を中心とした主題選択パターンが見られる。題述では、泣きの特徴が示されている。つまり、(B1)の「変化」とは、新生児の成長する時間の推移に対応する泣きの特徴の変化であることが理解できる。ジャンルの構成要素 B)は、ハイパー主題によって開始し、時間的展開の主題連鎖と、話題 subject matter である「泣き」を中心に展開する主題選択パターンにより、ハイパー主題に対するハイパー題述が提示されることで、首尾一貫したまとまりとなっているのである。

しかし、B)を終止する合図はなく、このまま次の発達段階（たとえば「生後十二週では……」というように）に展開していくことはこの時点では可能である。ところが、(C1)で「このような泣きの表出の変化（に対して）」という名詞化によってまとめられる（抽象化される）ことで B)の終結が示唆されている。そして、「養育者（通例は母親）の反応も」という主題が提示され、B)と C)の間に意味的な境界があることが明らかになる。C)は新生児の泣きの変化に対応する養育者の反応の変化が説明されており、これは、マクロ主題(A1)の「相互作用においても」に対応する。

構成要素 D)では、(D1)で「乳児側の泣きの変化は」という名詞化主題で B)の内容が要約され、また、「まわりの大人との関係の変化でもある」という名詞化新情報で C)の内容が要約されている。これはマクロ主題(A1)に対応するもので、なおかつ、先行テキストの各段階を要約して

いることから、(D1)は、マクロ新情報だと言える。このように先行テキストの内容を要約し、抽象化することで、ジャンル構造の構成要素に対応する、テキストの意味上の境界が設定される。以上の分析を図 3<sup>11)</sup>に示す。

		Theme	Rheme
A	1	泣きもまた	相互作用…重要な意味をもつ
B	1	泣きの研究によれば	次のような <b>変化</b> が見られる
	2	生まれたばかりの新生児は	突然激しく泣きだし
		最初の一、二回の発声 は	非常に長く、……
	3	生後二日においては	泣きは
	4		この時の泣きは
	5	生後四週ごろになると	泣きは
	6	この時期には	
	7	(つまり)	泣きにおいて
	8	八週ごろから	
	9	(そして)	泣きの発声に
C	1	(このような泣きの表出の変化に対して)養育者の反応も	変化していく
	2	泣きや…対処の仕方	変化していくのである
	3	生後…やり方は	抱き上げたり…もののなのだが
D	1	(このようにして)乳児側の泣きの変化は	まわりの <b>大人との関係の変化</b> でもある
	2	その原因が…といえば	おそらくその両方で
		また個人差も	大きい
	3	(それにしても)	泣きという…という様子が見られるのである

図3 テキスト1の主題構造と情報の展開(筆者作成)

主題構造、情報構造、名詞化という語彙 - 文法的資源は、各構成要素内の首尾一貫したまとまりを作り上げるだけでなく、構成要素間の境界を設定し、かつ、テキスト全体の首尾一貫性を生み出すことにも貢献しているのである。

### 3.3.2. 報道

山口(2000)は、報道記事の分析から、主題選択パターンが「特定のジャンル構造の構成要素の具現に貢献しているとも言えよう」(p.33)と述べている。本稿で取り上げた報道テキストではどうであろうか。

テキスト2では、(A1)で、不正の内容と、逮捕という事態が提示されている。ここでは、「業務上横領の疑いで」が新情報である。(A2)では、(A1)の題述の一部、「幹部」が主題となり、幹部の立場が題述にかつ新情報として導入される。また、(A1)の新情報などを受けて横領総額が主題として取り上げられている。2つの文<sup>12)</sup>からなるA)は主題展開によって結束している。

(B1)では、(A1)の題述の一部「逮捕した」が受動化されたものが主題となり、逮捕された人物が題述かつ新情報である。(B1)の主題は、(A1)の内容に言及するために用いられ、いわば(A1)にさかのぼるという機能を果たしている。この主題の機能により、(A1)とB)の結束が明示され、B)の内容が(A1)の敷衍であることが理解しやすくなる。主題は、核とサテライトのつながりを明示するという機能を担っていると考えられる。

C)は逮捕された容疑者の名前が主題となっているが、内容上はB)との結びつきが弱い。これば、A)で「幹部」となっていた人物が、B)においてすでに同定されており、「幹部」にさかのぼる場合でも、容疑者名が用いられるためであろう。実際に、(C1)の主題は、(A2)にさかのぼって言及する機能を果たし、C)の後続する文では(A2)の「隊員から集めた親ばく会費や食事代などを管理する立場」、「約1000万円に上る」をさらに詳しく説明している。

またC)では、形態的には具現されてはいないものの、(C1)の主題が各節の主題となっている。(C3)の最初の節で「これらの～預金口座と金庫は(T) + 西川容疑者が1人で管理しており(R)」という主題 - 題述構造が現れてはいるけれども、その後の「現在の職務に就いてから計約1000万円を着服していたという」という題述だけの節は、(C1)の主題を保持していると見ることができる。(C1)の主題は核にさかのぼるという機能を果たすだけでなく、C)という構成要素内の節間の結束的つながりにも貢献している。

(D1)は「先月下旬」が主題となっている。この主題は、核の内容に直接言及しているわけではない。しかし(D1)は、「不正が発覚した」という題述からも分かるように、(A1)を敷衍している。(D1)は、主題で時間的コンテキストを提示し、核とのつながりを暗示している。テキスト2の分析で「敷衍 + コンテキスト化」としたのはこのためである。

(E1)は、事件のそのものには言及していない。(E1)の主題「西川容疑者は」は、A)に現れている「幹部」を指し、A)とのつながりを示している。ただし、(E1)は、A)のどちらかを敷衍しているのではなく、A)全体に対する背景的情報を提示するものである。図4にこれまでの分析を示す。なお、(A1)と(D1)の題述間の関係は破線で示した。

		Theme	Rheme
A	1		愛知県警機動隊の…ことが分かり
		同県警捜査2課と小牧署は	この幹部を…逮捕した
	2	幹部は	…する立場にあり
		横領総額は	約 1000 万円に上るとみられている
B	1	逮捕されたのは	…容疑者で
			今年7月…した疑い
C	2	西川容疑者は	…充てていた
	1	西川容疑者は	昨年…移動
			会計担当の隊長補佐となり
			…を隊員から徴収していた
	2	これらの現金を振り込む銀行の預金口座と金庫は	西川容疑者が1人で管理しており
			現在の職務に就いてから計約 1000 万円を着服していたという
D	1	先月下旬	…苦情が寄せられ
			不正が発覚した
	2	県警では	…と説明している
E	1	西川容疑者は	1970年に採用され
			主に警察署や県警本部の各部署で会計業務を担当していた

図4 テキスト2の主題構造とテキスト展開（筆者作成）

以上のように、報道テキストにおいては、主題が、サテライトの開始を合図し、核とのつながりを示すという機能を果たしている。テキスト2では、先行テキストを要約する際に用いられるタイプの名詞化が見られなかった。これは、報道テキストが、段階ごとに徐々に進展していくという構造ではなく、サテライト間のつながりが希薄なテキスト構造をとることによるものであろう。

#### 4. おわりに

本稿では、2種類のジャンルを取り上げ、ジャンル構造の特徴と、語彙-文法的資源がジャンル構造にいかに関わっているのかを見てきた。

ジャンル構造は、テキストの目的によって異なる。たとえ同じ話題を扱っていたとしても、話題となっているものについて分類し、説明する場合（たとえば、入門書や学術テキストなど）と、話題となっているものをどのように使うのかを説明する場合（たとえば、機器の説明書、マニュアルなど）すなわちテキストの目的が異なる場合、それぞれのテキストの展開構造は大きく異なるのである。テキストの目的という観点から、テキストの意味的な構造を捉えるというマクロの視点をとることにより、テキストの部分のまとまりやテキスト全体の首尾一貫性を明らかになる。

これまでの研究では、文間の関係からの、いわばボトムアップの視点からの文章構造の解明が多く見られた。ジャンル構造というマクロの視点からのテキスト構造の分析は、ミクロの視点の研究、メゾの視点による分析（野村 2000）と相互補完的な関係にあると思われる。

次にジャンル構造と語彙-文法的資源との関係についてである。説明というジャンルは、テキストが段階的に展開する構造となっていた。テキスト 1 では語彙-文法的資源が、テキストの段階的展開に貢献していた。マクロ主題では、テキスト展開の中心となる話題を節レベルの主題によって提示し、また、展開の方向性を節レベルの題述、新情報で予告していた。より具体的な説明に移行する際、すなわち、ジャンル構造の構成要素が移行する際、構成要素間の意味的境界が主題や名詞化によって表されていた。

報道のジャンルは、ジャンル構造が説明のジャンルの構造とは大きく異なり、核とサテライトからなるという構造であった。サテライト間の移行、境界は主に主題によって表されていた。主題は、境界を設定し、また、核の情報を引き継ぐことで核とサテライトとの間の関係を示唆していた。連続的に展開するテキストではないため、ハイパー新情報などは見られず、そのため、新情報や名詞化がジャンル構造の具現に貢献する様子は観察することはできなかった。

このように、テキスト形成的メタ機能と名詞化という語彙-文法的資源は、ジャンル構造の具現に大きく貢献している。

主題のテキスト展開への寄与は、今後、龍城(2000)の伝達的ユニットやスーブラテーマという視点からも考察する必要がある。伝達的ユニットとは、語彙 - 文法層よりも意味を志向したレベルの単位であり、意味的なまとまりであるジャンル構造の構成要素との関連や一致が見られるのではないだろうか。また、佐藤(1999)のテキスト意味的単位、談話機能的単位という観点からも迫ることができるだろう。こうした観点からの研究が、Martin のいう、テキスト形成的メタ機能における節の構造に対応したジャンル構造の解明につながるとと思われる。

本稿では、2 つのテキストの分析しか行えなかった。ジャンル構造は、Eggs & Martin (1997) の指摘の通り、蓋然論的なものであり、本稿での分析から明らかになった特徴は、より多くのテキストの分析を通じて検証していく必要がある。また、より複雑な論理が要求される議論などのジャンルの分析を行い、日本語に特有のジャンル構造を解明する必要もあるだろう。これは今後の課題としたい。

## &lt; 注 &gt;

- 1) 記号「^」は、構造の構成要素の順序を表す。この A^B の場合、A は常に B よりも先に現れる。Derewianka のサンプルテキストを簡単にまとめて記す。目標「凧をつくろう」^材料「籐3本(60cm 2本、80cm 1本)・糸・紙(以下略)」^方法「1.籐をしめらせ柔らかくする、2.籐を慎重に曲げて、糸でしばる、(以下略)」。
- 2) Martin は他のメタ機能、すなわち対人的メタ機能、テキスト形成的メタ機能における節の構造に対応したジャンル構造の可能性と必要性を論じている。しかし、本稿では紙幅の都合でこれらについては扱わない。
- 3) 丸括弧にくくられた構成要素は随機的要素である。この要素が具現されないテキストもあるということである。
- 4) 便宜上、各構成要素に A) から D) の記号を付し、また、各構成要素内の文に番号を付した。文に言及する場合、たとえば A) の(1)に言及する場合、(A1)という表記を用いる。テキスト 2 でも同様である。
- 5) 結束性は照応 reference、省略と代用 ellipsis and substitution、接続 conjunction、語彙的結束性 lexical cohesion と多岐にわたるため、紙幅の都合もあり本稿では取り上げない。ただし、必要に応じて言及することがある。
- 6) マクロ主題、ハイパー主題とはいわゆるトピック文のことであり、語彙-文法層の概念とは言えず、意味層に属するものである(山口 2000:29、Martin & Rose 2003:Ch.6 参照)。これらは、後続するテキストにおけるテキストの展開の技法を構成する、節レベルの主題選択パターンを予告する(Martin 1993:245)。
- 7) マクロ主題、ハイパー主題から各節への展開は次の 3 種類の可能性が考えられる：(A)マクロ主題、ハイパー主題の節レベルの主題から後続節の主題に情報が引き継がれるパターン、(B)ハイパー主題、マクロ主題の節レベルの題述、とりわけ新情報と題述が重なり合う部分から後続節の主題へと展開するパターン、(C)マクロ主題、ハイパー主題全体の内容が後続節の主題へと展開するパターン。  
また、野村(2000)は、日本語の主題展開パターンの、より細密度の高い類型化を行っている。主題(野村は「提題表現」と呼ぶ)の指示対象の意味論的相互関係を、a.継続(近傍の文の提題表現の名詞句・名詞節が同一指示の関係で連続する)、b.対等(近傍の文の提題表現の名詞句・名詞節が意味論的に対等の関係で連続する)、c.階層(近傍の文の提題表現の名詞句・名詞節が意味論的に階層関係あるいは派生関係で連続する)、d.移行(任意の文の叙述表現に含まれている名詞句・名詞節、あるいはその文の任意の部分が、同一指示の関係で、後行する近傍の文の提題表現に移行して連続する)、という 4 種類に分類している。さらに、テキストの時間的關係性を x.推移(個々の自体がたがいに時間的に推移する関係にある)、y.非推移(個々の事態がたがいに時間的に推移しない関係にある)、という 2 種類に分類しており、x、y.それぞれに a.から d.までの 4 種類の展開パターンが想定され、合計で 8 種類の主題展開パターンが提示されている(pp.165-7)。
- 8) Matthiessen(1995:575)は、主題にはテキストを展開する方法についての情報が含まれるとしており、展開の技法の種類として、時間的 temporal、空間的 spatial、リスト lists、一般から特殊へ general to specific、対象から属性へ object to attributes、対象からその部分へ object to parts、比較と対照 compare and contrast を挙げている。
- 9) 本稿で言及する名詞化は経験構成的比喩としての名詞化に限定する。また、紙幅の関係もあり、ここでは概要のみを示すこととする。詳しくは阿部(2004)を参照されたい。
- 10) 以下では、主題を T (=Theme)、題述を R (=Rheme)、新情報を N (=New) で表す。
- 11) 矢印は主題展開における情報の移行を表す。名詞化には下線を付し、新情報は必要に応じて太字でしめした。図 4 でも同様。
- 12) 「文」とは便宜上用いている単位であり、SFT の基本単位ではない。SFT における基本単位は節 clause である。

## &lt; 参考文献 &gt;

阿部聡 (2004) 「観念構成的比喩としての名詞化」『欧米の言語・社会・文化』第 10 号 新潟大学大学院  
現代社会文化研究科、pp.1-30.

市川孝（1978）『国語教育のための文章論概説』教育出版．

小泉保編（2000）『言語研究における機能主義 誌上討論会』東京：くろしお出版．

佐藤勝之（1999）「体系機能文法によるテキスト分析の可能性 ESL 教授用資料を用いて」武庫川女子大学文学部五十周年記念論文集編集委員会編『武庫川女子大学文学部五十周年記念論文集』大阪：和泉書院．pp.25-37(pp.630-642).

龍城正明（2000）「テーマ・レーマの解釈とスーブラテーマ プラッグ言語学派から選択体系機能言語学へ」小泉編所収 pp.49-73.

永野賢（1972）『文章論詳説』東京：朝倉書店．

野田尚史（1996）『「は」と「が」』東京：くろしお出版．

野村真木夫（2000）『日本語のテキスト 関係・効果・様相』ひつじ書房.

\_\_\_\_\_（2003）「テキストの意味と構造」佐久間まゆみ編『朝倉日本語講座 7 文章・談話』東京：朝倉書店．pp.211-226.

林四郎（1973）『文の姿勢の研究』東京：明治図書．

ハリデー、M. A. K. 著、山口登・笈壽雄訳（2001）『機能文法概説』東京：くろしお出版．

山口登（2000）「選択体系機能理論の構図 コンテキスト・システム・テキスト」小泉編所収 pp.3-47.

Butt, D., R. Fahey, S. Spinks, & C. Yallop (1995) *Using Functional Grammar: An Explorer's Guide*. Sydney: National Center for English Language Teaching and Research, Macquarie University.

Christie, F. & J. R. Martin (eds.) (1997) *Genre and Institutions: Social Processes in the Workplace and School*. London: Continuum.

Derewianka, B. (1990) *Exploring How Texts Work*. New South Wales: Primary English Teaching Association.

Downing, A. (2000) "Nominalization and Topic Management in Leads and Headlines," in E. Ventola (ed.) *Discourse and Community*. Tübingen: Gunter Narr Verlag pp.355-378.

Egins, S. & J. R. Martin (1997) "Genres and Registers of Discourse," in T.A. van Dijk(ed.) *Discourse as Structure and Process*. London: Sage. pp.230-256.

Fries, P. H. (1983) "On the Status of Theme in English: Arguments from Discourse," in J. S. Petofi & E. Sozer (eds.) *Micro and Macro Connexity of Texts*. Hamburg: Helmut Buske Verlag pp.116-152.

\_\_\_\_\_（2002）"The Flow of Information in a Written English Text," in P. H. Fries, M. Cummings, D. Lockwood & W. Spruiell (eds.) *Relations and Functions within and around Language*. New York: Continuum. pp.117-155.

Halliday, M. A. K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar 2<sup>nd</sup> ed.* London: Arnold.

\_\_\_\_\_ & J. R. Martin (1993) *Writing Science: Literacy and Discursive Power*. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press.

\_\_\_\_\_ & C. M. I. M. Matthiessen (1999) *Construing Experience through Meaning*. London: Cassell.

Iimura, R. (1999) "Grammatical Metaphor in English Newspaper Reports: A Systemic Functional Approach



-Theoretical Background to the Analysis-" *Ronso*, Vol.14, Tamagawa University, pp.59-111.

Martin, J. R. (1989) *Factual Writing: exploring and challenging social reality*. Oxford: Oxford university Press.

\_\_\_\_\_ (1992) *English Text*. Amsterdam: John Benjamins.

\_\_\_\_\_ (1993) "Life as a Noun: Arresting the Universe in Science and Humanities," in M. A. K. Halliday & J. R. Martin pp.221-267.

\_\_\_\_\_ (1997) "Analysing genre: functional parameters," in F. Christie & J. R. Martin (eds.) pp.1-39.

\_\_\_\_\_ & D. Rose (2003) *Working with Discourse*.

Matthiessen, C. M. I. M. (1995) *Lexicogrammatical Cartography: English Systems*. Tokyo: International Language Science Publishers.

Rose, D. (1997) "Science, technology and technical literacies," in F. Christie & J. R. Martin (eds.) pp.40-72.

Thomson, E. (2001) "Theme, T-unit and Method of Development: An Examination of the News Story in Japanese," *JASFL Occasional Papers* vol.2 No.1 JASFL. pp.29-37.

White, P. (1997) "Death, disruption and the moral order: the narrative impulse in mass-media 'hard news' reporting," in F. Christie & J. R. Martin (eds.) pp.101-133.

#### <使用テキスト>

無藤隆(1994)『赤ん坊から見た世界』東京：講談社現代新書。

Yomiuri Online (読売新聞社) <http://www.yomiuri.co.jp/index-j.htm> (アクセス日：2001 年 10 月 22 日)

主指導教員(大石 強教授) 副指導教員(山内志朗教授・船城俊太郎教授)